

農作物技術情報 第4号 花き

発行日 平成21年 6月26日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- りんどう 葉枯病、ハダニ類などの病害虫防除を徹底しましょう
小ぎく 白さび病、ハダニ等の病害虫防除を徹底しましょう
収穫前に次年度用の健全な母株を選抜しましょう
共通 ほ場乾燥が続く場合は早めにかん水しましょう
圃場の排水対策を実施し、湿害を回避しましょう
切り前・選別基準の遵守により、揃った品質で出荷しましょう

1 りんどう

(1) 生育概況

露地栽培極早生品種の出荷が始まっています。春先の乾燥による影響で、やや草丈の短い圃場も見られますが、全般的には草丈・節数はおおむね平年並みとなっています。

葉枯病などの病害の発生は少なく推移していますが、ハダニ類やハモグリバエなどの害虫の発生が見られています。

本年の苗定植は、育苗もおおむね順調に経過し、ほぼ問題なく終了しています。

(2) 圃場管理

ア ネット上げ

フラワーネットの最上段が草丈の7割程度の位置となるように、こまめに上げて茎の曲がりの発生を防ぎます。また、ネットに葉が引っ掛かり曲がることも多いので、随時圃場の見回りを行い、修正してください。

イ かん水・排水対策

雨が少なく乾燥気味の場合には、極度に乾燥する前に通路等にかん水します。また逆に長雨や集中豪雨で圃場に滞水することで、根に障害が生じ生育不良となることや、上位節間が伸びて品質低下の原因となることがあるので、圃場に滞水しないよう排水対策を施します。

(3) 収穫・調製・出荷

ア 収穫

収穫は頂部の蕾が膨らみ色づいた頃が標準です。ただし、出荷先やバケツなどの輸送形態等により早めの収穫とする場合もありますので、事前に確認し仕向け先に合わせた切り前とします。

収穫は日中の高温となる時間帯をさけ、涼しい朝夕に行います。やむを得ず日中採花する場合は、収穫後直射日光に当たらないようにし、速やかに日陰に運び水揚げを行います。

株の消耗を防ぐため、必ず3本程度の茎を収穫せず残し、残った茎は残花部を折り取って種子が作られることによる消耗を防ぎます。また、残花部の折り取りはアザミウマ類や、アブラムシ類の被害低下へも効果的です。

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意下さい。

イ 乾燥

雨天時に収穫した場合や朝露がついている場合は、扇風機や切り花乾燥機を用いて必ず乾燥させます。濡れたまま結束したり箱詰めしたりすると輸送中の蒸れなどによる品質低下の原因となります。

水を切るため逆さにして振ることは、茎が折れることに加え、花の蜜が花弁や葉などに付着して品質低下の原因となる場合があるので極力避けます。

ウ 選別

花段数、長さ、太さ、曲がりなどを基準に選別します。出荷規格を遵守し、信頼を落とさないようにします。病害虫の被害があるものは出荷しないことを基本とします。

また、暗い作業場での選別作業は病害虫痕の見落としなど品質の低下につながることに加え、作業者の目が疲れ作業性の低下や疲労が増大することとなります。りんどうの選別は花段数の確認等で目を酷使しています。作業場全体と選別を行う作業台の明るさを十分確保します。

エ 調製・水揚げ

選別調製後、規格別に10本束にして水揚げを行います。

束とする10本の切り前や品質が揃うよう留意します。水揚げが長時間になると輸送中に蒸れることがあるので、極端に長い時間(24時間以上)の水揚げは控えます。

21年度から出荷箱のサイズが、従来に比べ長さが10cm短くなっています。これに伴い標準出荷規格が一部変わっています。極晩生種等の2L規格が長さ85cmとなるので、各地域の目揃会等で規格を確認のうえ出荷してください。

オ 箱詰め

各部会等で決められた方法で箱詰めを行います。内容物が輸送中に動いて傷むことがないように確実に固定します。

(4) 病害虫防除

ア 葉枯病

これまでのところ下位葉部分に発生が見られていますが、発生は少なく推移しています。降雨により急激に増加し、中上位葉まで発生することが多いので、定期的に薬剤散布を行い、初期防除に努めます。薬剤散布は降雨前に行うことが理想ですので、気象情報を確認しながら効果的な防除をおこないます。

イ 褐斑病

7月下旬まで重点的な防除を継続します。早生種では収穫時期が近いので、葉の汚れに注意し、ダコニール1000+展着剤または、ストロビーフロアブルを使用します。葉枯病との同時防除とする場合はダコニール1000を選択します。



ウ アザミウマ類

蕾がふくらみ着色が始まる頃から蕾に侵入し、花弁を吸汁する被害が見られます。蕾の中にはいると薬剤がかからず、大量に増殖して被害が大きくなりますので、侵入を防ぐよう寄生前の予防に努めます。

写真1 褐斑病

アザミウマ類は雑草を含むあらゆる植物に寄生するので、周辺の作物の防除、雑草の処理を必ず行ってください。

また、着蕾期前にシルバーの反射テープを支柱上部に張ることで、アザミウマの発生が大幅に減らすことが可能な現地事例があります。さらに、残花茎でのアザミウマの増殖を抑えるために、開花収穫後の残花茎は折り取り処分することが効果的となります。



写真2
反射テープによるアザミウマ防除

エ ハダニ類

高温・乾燥期に発生が多くなります。葉の裏側に寄生するので、葉裏を観察して発生初期に防除を行います。薬剤散布は散布量を十分に、葉の裏側を洗うように散布すると散布むらも無くなり効果が高まります。

なお、ダニ剤の使用においては同系薬剤の1年1回使用を基本に、抵抗性の発現を避けてください。

オ リンドウホソハマキ

越冬世代の羽化・産卵が平年より早まり、その後の茎への潜入により被害の発生が見られます。地域での発生消長を確認して適期防除をします。



写真3
ホソハマキの茎への潜入痕

2 小ぎく

(1) 生育概況

定植後の乾燥で草丈がやや短く不揃いも見られますが、ほぼ平年並みの生育となっています。地域によりナモグリバエ、ハダニ類の発生が多く見られます。

(2) 土壌水分管理

雨が少なく圃場が乾燥すると側枝の伸長不良や開花遅れの原因となるので、極度に乾燥する前に水を与えます。また逆に梅雨期の長雨や夏秋期の集中豪雨などに備え、排水溝の整備を行います。キク類の根は滞水に弱いので特に注意が必要です。

(3) 下葉取り

蕾が見える頃になったら、地際から2.5cm程度の葉を掻き落とし、通風をよくすることで、病害発生の抑制、収穫作業の効率化をはかります。

(4) 親株の選抜

次年度用苗の採穂に使用する親株は、収穫後では形質や病害感染が確認できないので、収穫が始まる前に次の点に留意して親株の選抜を行い、目印を付けておき、収穫後に親株とします。

ア 草丈が十分に伸び、草姿が優れる

イ 開花期が目的の時期に合う

ウ 病虫害（特にウイルス、ウイロイド）に侵されていない

エ 株の生育・充実状態が揃っている

なお、わい化病やキクえそ病に感染した株や、発生株周辺の感染のおそれのある株は必ず抜き捨てて圃場に残さないことが被害拡大防止の基本です。

(5) 収穫・調製

りんどうと同様に、切り前や作業時の環境に留意して収穫・調製を行います。

小ぎくでは、花弁が着色して爪立ちとなった頃が収穫適期となりますが、出荷時期や出荷先、品種によって異なる場合もあるので、仕向け先にあわせた適正な切り前を確認し、調製します。

(6) 病害虫防除

今年は、白さび病、ハダニ類、ナモグリバエなどの病害虫が発生しています。発生前の予防、発生初期の防除を心がけてください。

ミカンキイロアザミウマ等が媒介するキクえそ病(TSWVによる)などのウイルス病が見られるので、アザミウマ類等の害虫防除を徹底します。圃場内外の雑草が各種害虫の増殖源となるので、雑草防除も必ず行ってください。

(7) 病害株の抜き取り

キクに発生するわい化病(キクわい化ウイルス) キクえそ病(TSWV)に感染した株は薬剤散布などで治療ができないことから、健全株への伝染源や、母株とすることでの翌年の栽培への発病株の広がり等の原因となるため、見つけしだい抜き捨てることを徹底してください。

3 その他花き

(1) トルコギキョウ

生育に応じてかん水を控えて締まった草姿を目指します。また施設の温度、肥培等の管理を適正に行い、生育量確保を図るとともに、生育障害発生を抑制します。

(2) アルストロメリア

秋の開花を充実するためには夏期間は収穫を休み、株充実のため花蕾摘除、葉芽・枯れ茎の整理を行います。品種によって量は異なりますが、夏期は肥料・かん水が過剰にならないよう少なめに管理し、地温を下げるために、遮光や地冷を行います。

また、株養成中にオンシツコナジラミが発生することがあるので、適宜防除を行います。

(3) ユリ類

抑制作型では遮光を行って地温低下を図りますが、梅雨期等日照が少ない時期はできるだけ日照を確保するよう遮光率の低いものに換えたり、遮光資材をはずしたりすることも必要です。

(4) ストック

7月下旬が無加温作型のは種期です。育苗管理では、施設の気温上昇を抑制すること、苗の生育を揃えるため均一で適切な水分状態を保つことがポイントです。

気温上昇抑制のためには施設を遮光資材で覆うほか、育苗箱を直管やブロックなどで作ったベンチ等に置き、風通しをよくすることや、周辺に散水することなども有効です。ただし遮光資材は育苗後半や曇天時には、除去して徒長を防ぎます。

かん水は、一時に多量にかん水すると胚軸の徒長を招くので、少量ずつ回数多く行います。

八重鑑別は播種後3～5日の発芽揃い時、子葉展開時、定植直前の3回に分けて行います。

(5) パンジー

秋出荷作型では7月下旬以降が種期となります。パンジーの発芽は高温で抑制されるので、ストックと同様に育苗環境整備、冷蔵庫の利用等により成苗率の向上、徒長防止を目標とします。遮光は適宜調節し、日照を確保してください。

次号は7月30日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

**6月1日～7月31日は
農薬危被害防止運動期間です**

近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
農薬の保管・管理は適切にしましょう